

オーストラリア捕虜の子・孫、来神 一神戸空襲と捕虜たち

飛田雄一



左は、娘さん、その娘、おつれあい、奥さま。右は、飛田、John Grounds さん、田村佳子さん（神戸港 平和の碑の前で）

11 月 2 日、オーストラリアから John Grounds さんが神戸に来られた。父・Sidney Aloysius Grounds さんは、アジア・太平洋戦争の時期に神戸で捕虜生活を強いられた。父の足跡を訪ねるための訪問だった。POW 研究会の田村佳子さんと私が案内した。3 月には同じくオーストラリア捕虜の息子タイソーさんらが訪問している。（むくげ通信 3 月号、飛田レポート参照）

Sidney Aloysius Grounds さんは、マレー半島の戦いに従軍し、シンガポールで日本軍の捕虜となった。1943 年 5 月 16 日シンガポール出港、高雄を経由して 6 月 7 日、門司到着。列車で神戸の収容所（大阪俘虜収容所第 2 分所。通称、神戸ハウス）に入った。主に三井倉庫で働き、また料理ができたので、コックとしても神戸ハウスで働いた。1945 年の神戸空襲で神戸ハウスも壊滅的な打撃を受け、丸山収容所に移動、その後、脇浜収容所で終戦を迎えた。（田村さんの聞き取りより）

われわれは、前日に有馬温泉に奥さま娘家族とともに泊まっていた一行と新神戸駅で合流した。ジャンボタクシーで、関連施設等を訪問した。

まず、新神戸から東 1 キロの捕虜病院跡へ。神戸市文書館の南だ。1941 年に自主閉鎖した神学校を日本軍が接收して捕虜病院としたのだ。

今回は、タクシー運転手の事前の調査によって最短コースを回ることができたが、次は、脇浜（わきのほま）収容所跡。現在が大きなドン・キホーテとなっている。私の記憶では戦争中に黒く塗られた小学校校舎が残っていた。神戸空襲により収容所が被害にあい、最終的にこの脇浜収容所で捕虜は終戦を迎えた。

3 つ目は、丸山捕虜収容所跡。神戸電鉄丸山駅から 10 分ほどのところにある。むくげ通信 3 月号で紹介したが、当時小学生であった女性がやせ細った外国人がかわいそうだと豆を入れてあげたところだ。

4 つ目は、神戸港。まず、ポートタワーに登っ

た。父 Grounds さんが働かされた三井倉庫方向を見たが、その建物を直接みることはできなかった。

そして 5 つ目に＜神戸港 平和の碑＞。この碑があることをたいへん喜んでくれた。私は何度も握手を求められた。となりにある「非核神戸方式のモニュメント（美海ちゃん像）」にも興味を示し大切なことだと言ってくれた。

最後は、神戸収容所跡。神戸市役所南、東遊園地西の神戸港郵便局および駐車場となつてるところだ。今回、John Grounds さん一行は、本人、奥さま、娘（東京で働いている）、そのお連れ合いさん、そしてその娘。かわいい娘さんは、東遊園地でのイベントに大はしゃぎしていた。

POW 研究会が作った『捕虜収容所・民間人抑留所事典』（すいれん舎、2023 年 12 月）より以下、概略を説明する。田村さんは、神戸関連部分の執筆者だ。

神戸の捕虜収容所は、1942 年 9 月 23 日、大阪俘虜収容所神戸分所として開設された。労働現場は、日本通運湊川支店、同東灘支店、神戸船舶荷役会社、東洋製鋼、吉原製油、昭和電極など。

1945 年 6 月 5 日の神戸空襲で焼失して、丸山収容所に移った。捕虜病院も同日の空襲で焼失し、その病人らも丸山収容所に移った。丸山の施設は仮の施設で、6 月 21 日には、丸山収容所から脇浜収容所に移っている。病院は、その丸山で 6 月 19 日に再開している。

1945 年 8 月 15 日に脇浜で終戦を迎えた捕虜は、488 人。イギリス 360、オーストラリア 73、アメリカ 26、オランダ 17、ギリシャ 5、アイルランド 3、中国 2、英領マルタ 1、カナダ 1。収容中の死者は 134 人。イギリス 118、オーストラリア 8、アメリカ 6、オランダ 2。イギリスの死亡者が多いのは 1942 年 9 月 27 日、香港から日本に向かったリスボン丸が上海沖で米潜水艦の攻撃を受けて沈没し生き残って日本に向かった捕虜も衰弱甚だしく死亡者が続出したことによる。

『事典』に神戸港で労働を強いられた捕虜の写真（99 頁）がある。香港の研究者、Tony Banham さんの提供によるものだ。



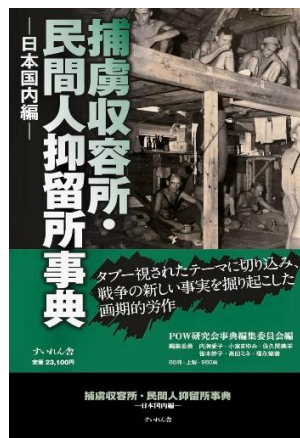
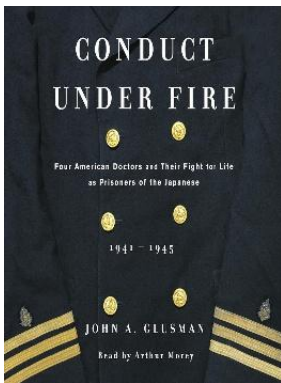
神戸の三井小坂倉庫で荷役に就く捕虜（神戸ハウス収容所写真）。（Banham, Tony, "Tishubition", Hong Kong War Diary website）

『事典』には、捕虜病院が 1945 年 6 月 5 日に

空襲され、病人たちが丸山収容所に移動した様子が書かれている。

「5 日夜は、毛布もないまま、地面に直接横になり、翌 6 日早朝、俘虜病院の 57 人の患者の、丸山への険しい山越えの移動が始まった。直線距離にして約 6.5km の道のりであった。折しも台風の接近で風雨の激しさが増す中、39 人が担架で、13 人が仲間に支えられて歩行、彼らは結核、栄養失調、手術後の体だった。また 17 人は重度のやけどを負っていた。誰もが痩せて幽霊のようによろめきながら暴風雨の中を歩いた。大橋軍医の助手が 10 人の日本兵を連れて来てくれ、神戸ハウスの収容所からは 100 人の捕虜が援助にやって来た。翌 6 月 7 日午前 4 時、全員が丸山に到着した。風雨の中の山越えの影響で 10 人の患者が亡くなったが、捕虜軍医たちは大橋軍医がいなければ死者数はもっと増えていただろうと、1945 年 6 月 17 日、大橋軍医に連名の感謝状を渡した」(374～375 頁)

病院で軍医をしていたアメリカ人・グラスマンさんは、大橋さんを「人格者」と称賛している。彼は、大橋さんに会いたいと日本の新聞に協力を求めた。大橋さんは亡くなっていたが息子と連絡がとれた。グラスマンさんは日本を訪ねることはできなかったが、息子が来日し、大橋さんの息子と会うことができた。調査活動のメンバーで神戸港強制労働の本に連合軍捕虜の論文を書いた平田典子さんはその場に立ち会った。



グラスマンさんの息子は作家だ。『Conduct Under Fire: Four American Doctors and their Fight for Life as Prisoners of the Japanese 1941-1945 (炎の中での指揮—1941～1945 名の米医師と捕虜の命)』(2005 年)を書いている。先の病院から丸山への移動についての記述もその本によって。父の体験を聞き取って書いているのである。田村さんがその本を見せてくれた。588 頁の大部なものだ。アメリカ Amazon で注文してみた。届いた。更に、ひょっとしたらネット翻訳が可能なのではないかと考えて、Kindle 版も買った。ネット翻訳 papago をしてみた。それなりの日本語になった。こんな記述がある。

「捕虜が収容されていた建物の門があった。その建物は火事になっていた。ジョン・レインの言

葉を借りれば、「シンガポール島で迫撃砲の砲撃に巻き込まれたとき、私は石のように固まっていた。ウェールズ丸の薄い船体を魚雷が切り裂くかもしれないと考えたとき、恐怖でいっぱいだった。今では、少し成熟したので、ただひたすらに恐ろしかっただけだ」。幸いなことに、爆弾の爆発によって男たちは破れ目から逃げる事ができた。彼らは兵站担当官の物資を救おうと駆け回った。

大橋のオフィスは残っており、彼はフレッド、ジョン、そして 4 人の医師が一時的な医療所として使用することを許可した。重傷者は病院の遺体安置室に移された。医師たちは負傷者の手当を続け、午後 6 時まで働いた。

患者たちが夜の床に就いたちょうどその時、大橋医師の助手である白井曹長が、10 人の兵士、3 つの担架、そして神戸ハウスからの 100 人の捕虜と共に到着した。白井はすぐに立ち去らなければならないと告げた。衛生兵たちは、荷役作業員が持ってきた扉から 6 つの臨時担架を作ったので、合計で 9 つになった。そしてフレッドは難しい決断を下さなければならなかった。誰を担架で運ぶか、そして誰が歩かなければならないかを選ぶことだ。

雨が土砂降りとなり、風も暴風へと変わった。彼らは暗闇の中を何マイルもさまよった。病人や負傷者、半分飢えた者や半死の者、まるで骨のように痩せた結核患者たちの哀れな行列であった。担架を運ぶのには 4 人が必要で、その他の者は肩に担いで運んだ。

警備員たちは患者たちを促した。フレッドは大橋に速度を落とすよう懇願した。大橋は彼に言った。「今夜は決して忘れられない夜になるだろう。」彼らは薄暗がりの中をつまずきながら進み、歩数を数え、眠気と戦った。責任に縛られ、不運に押しつぶされる運命の男たち。岩でつまずき、根に足を取られるたびに、自分が壊れてしまいそうだと感じた。」

Kindle 版は、単に各頁を PDF ファイルにしているだけだと思っていた。ちがう、Kindle 版用にレイアウトされている。(実は、私の本『現場を歩く 現場を綴る—日本・コリア・キリスト教—』(かんよう出版、2016 円)も Kindle 版が発売されている。私以外に買った人がいないようなので、よかったらお買いもとめください。)

このグラスマンさんの本、全訳を出版できればと考えている。神戸空襲記録の空白を埋める貴重なものだ。ジョン・レインさんの『夏は再びやってくる—戦時下の神戸・オーストラリア兵捕虜の手記』は 2004 年に、センター出版部から発行している。この本の出版したいものだ。

最近、捕虜関連の大きな出来事があった。神戸映画資料館が発見したリスボン丸の映像だ。先に紹介した上海沖で米潜水艦の攻撃された船だ。日本人将校が撮影したもので臨場感がある。

<https://www.asahi.com/articles/ASTBK0SCCTBKPTIL00VM.html> で見ることができる。戦後 80 年の今年、遠い過去のことのようであるが、新しい出会い、発見があった。